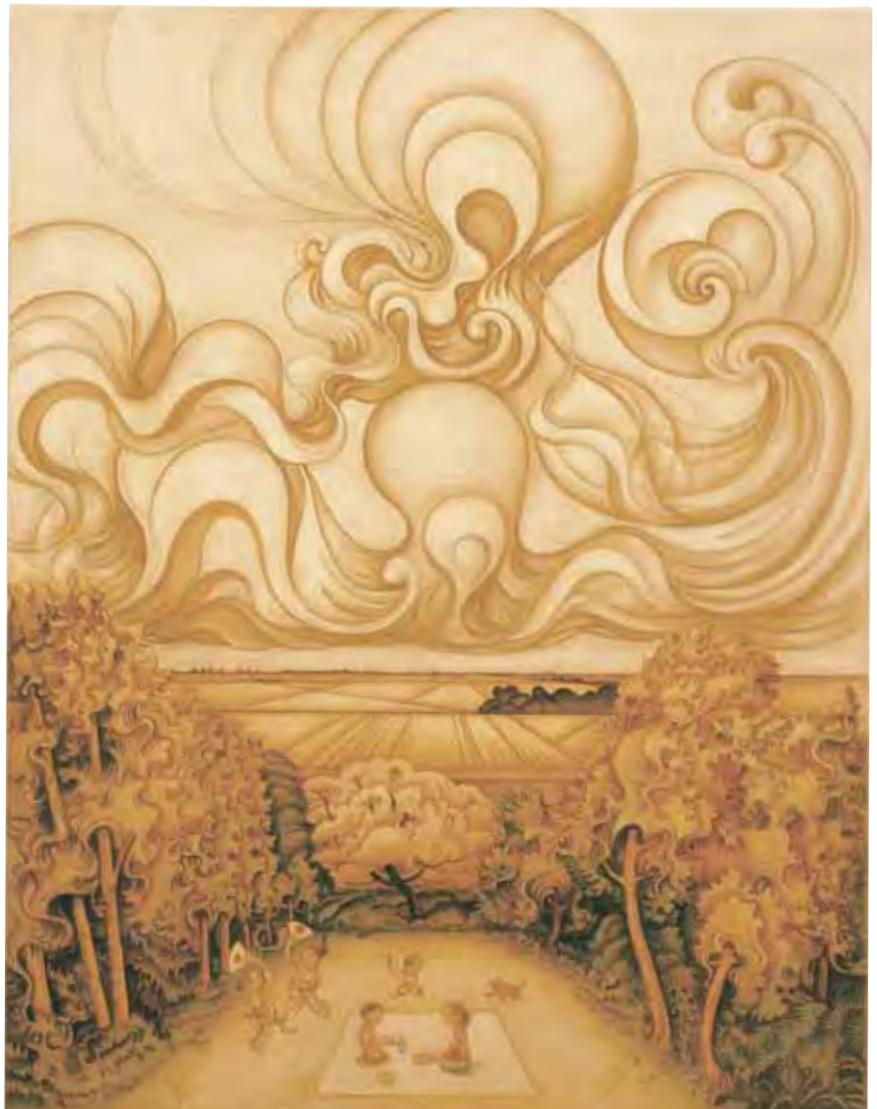


AR CA DIA

48
SPRING 2011

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



特別企画展「桃源万歳！」のための序曲

第六章 いつまでも心に輝く桃源郷

この「物語」を楽しんで書いているうちに、「桃源万歳！」展が始まってしまいました。しかも今回が、私の館長として『アルカディア』に寄稿する最後となります。——先を急ぎましょう。

主人公の漁師が岩山の洞穴から出て、桃源の村里のゆたかさとのどかさを眺めわたし、村のほうに下りかけると、そこで彼を見つけたのが何人かの村びとでした。今回の展覧会に出ている作品でも、この出会いの情景は大概もれなく描かれています。漁師のしるしに權をもったままの男をとりかこんでいるのは多くの場合、老人たちであり、そこに子どもが混じっていたりします。桃源の村のなかでも一番ひまで、のんびりと遊んでいた人たちですね。

村びとたちは見なれぬ異郷人のすがたにびつくりして、*Who are you?*

*Where do you come from?*と訊ねかけます。「どちらさんかね」「どこからいらした?」との問いかけに、漁師がくわしくこの日のこれまでの冒険を語って答えると、村びとはいよいよ珍しがって、「それじゃ、おなかもすいたでしょう」と、多分村長さんの家に連れて行って、さっそく酒と御馳走を出してくれました。

酒は濁酒どろぶだったのでしょうか。そしてさっきまで平和の象徴として鳴いていた鶏の二羽が絞め殺されて、鶏料理になったのです。この村が神仙たちの住む仙境などではな

いことは、宋の蘇東坡が指摘するとおり、これでいっぺんに明らかにあります。それにしても「桃源の鶏料理」とはどんな調理法だったのでしょうか?これまで誰もそれを考えた人はいません。研究してみたら、大学の卒論か、いい修士論文ぐらいになるかもしれませんね。

異郷の漁師ちんねい闖入の報は、子どもたちが「たいへんだ、たいへんだ」と触れまわったのか、たちまち村中に広まりました。村中の人が鶏料理を食べている漁師のまわりに集まってきた、口々にいろんな質問を浴びせかけます。ここでちょっと不思議なのは、村びとと漁師の言葉がすぐに通じたということです。なぜなら、村長さんが説明しているには、この村の人たちは、彼の先祖が六百年近い昔、秦の始皇帝時代の暴政に耐えかねて、一族と村民を引き連れてこの絶境に逃げこんできて以来、外の世界とはまったく関係を絶ってきた、というからです。いまの日本というなら、室町時代の初めのころからこの桃源郷に隠れ住んでいたということになります。画僧雪舟や周文と私たちはすぐに話を通じるでしょうか。

それはさておき、村長さんたちは漁師に外の世界のことをしきりに訊ねました。秦の後には前漢、後漢があり、魏の時代があり、いまは晋という王朝になっていると、漁師が知っている限りのことをくわしく答えてやると、村びとたちはみな「嘆惋たんわん」した、と陶淵明は書いています。いまもまだそんな王朝の盛衰交代があるのかと、驚き呆れ嘆いたというのです。漁師は村中で珍しがられ、評判になり、つぎつぎに村びとの家に招かれて酒食の饗応にあずかりました。そのたびに鶏は二羽ずつ料理されていたのでしょうか。

桃の花咲く 隠れ里の物語

館長 芳賀徹



奥村美佳《隠れ里》2011年

何日か逗留するうちに、漁師も自分の家や村のことが心配になったのでしよう。いよいよ桃源の村から帰ることになりました。別れぎわに、村びとの何人かはあの洞穴の口近くまで見送ってくれたのですが、そのなかの一人、多分村長さんが、漁師に向かって、「この村のことを外の世界の人たちに言いふらしてはいけませんよ」と申しわたしました。いわば桃源郷についてのタブーを与えたのです。

ここまでが「桃花源記」の真中の部分で、漁師による桃源逗留の体験談。この後の部分、終りの三分の一ほどが、桃源から帰還後の後日談となります。みごとに構成です。

漁師はあくまでもこちらの世の普通人、凡俗の人でした。村びとからタブーを授けられたにもかかわらず、彼は洞穴を逆方向にくぐりぬけ、もやつてあった自分の舟に乗りこむと、谷川を下りながらさつそくあちこちに目印をつけて行きました。そして自分の村に帰りつくと、すぐに県庁所在地に出かけて、県知事に桃源発見のいきさつを報告し、自分の手柄にしようとしたのです。知事にとつてもこれは所領拡張、観光開発の絶好の機会。すぐに漁師に先導させて部下を派遣しました。

ところが陶淵明の桃花源はやはり不思議の世界でした。漁師がタブーを破ったから、たちまち彼我の時差(超自然的時間の経過)が作動して、浦島太郎のように身体が萎えしなびて息絶えてしまった、などというお伽噺的な解決ではありません。漁師は得々として先導役をつとめていったのに、帰り路につけてきた目印はどうしたわけかみな消え失せて、あの桃源への川筋がどれなのか

まったくわからなくなっていたのです。どうしても桃花源への再週行は不可能でした。ただ、漁師による桃源発見のニュースだけは広まったらしく、武陵から遠く離れた南陽出身の道士、劉子驥もこの話を聞き知って、大よろこびで桃源行きを企てました。この人なら、俗物の知事や漁師とはちがつて、あるいは桃源を再発見できたかもしれません。しかし、まことに遺憾ながら、劉氏は企てを實行しないうちに病気で死んでしまいました。

「後には遂(か)くて津(しん)を問う者も無し」——その後は今日にいたるまで、桃源への入り口(津＝渡し場)がどこかを尋ねる人さえいないとのことだ——という「桃花源記」最後の一行がまたすばらしい。うまい。この一行のおかげで、桃源郷はついに消え去ることなく、いつまでもいつまでも春の日を浴び、鶏犬の声をこだまさせながら、私たちの脳裏に、詩的想像の世界のなかに、私たちの心のふるさととして、どこか谷川をさかのぼった山の洞窟のかなたに、存在しつづけることになりました。

そして陶淵明以来、一六〇〇年、この古典の名作中の名作は、中国、朝鮮、日本の詩人や画家たちの心をとらえ、彼らの心に働きかけて、つきからつきへとさまざまに詩歌や絵や小説を生みださせてきたのです。このたびの「桃源万歳！」展は、淵明歿後、世界ではじめて、この桃源郷の系譜のごく一部分をまとめて皆さまにお示りする機会となりました。

ゆつくりと、隅々まで御覧下さい。そして御自分の桃源郷を心のうちに見つけてくださいますように。

それでは一九九八年以来、長い間お世話になりました。皆さまお元気で！ さようなら！

桃源郷というテーマが、如何に現在性を持ち得るのか。企画側として、そんな素朴な問いを持ち、一つの答えとして試みたのが、現存の作家さん——吉本作次さん、今村哲さん、関智生さん、三瀬夏之介さん、奥村美佳さん、横内賢太郎さん——に桃源郷のテーマに取り組んでもらうことでした。

吉本さんには、旧作を含め四点を出品いただきました。吉本さんの油彩画のもつ造形性と空間性には特異なものがあります。その大きな要因に、中国絵画に特有の描写を取り入れていることが挙げられます。いくつかの作品にみられる、湧き立つような雲、積み重なる岩壁の様には、そのことがよく表れています。油彩という西洋由来の技法に拠りながら、それでもなお、脈々と続く東洋絵画の長い歴史のなかに自らの位置を定める吉本さんならば、桃源郷という画題を前に、面白い作品を描いてくれることだろう、また短絡的だと思われることは困るのですが、吉本さんの描く画題が、田園や楽園的風景であることも——造形を試みるための口実という側面が多分にあるでしょうが——、お願いを差し上げた理由の一つでした。メディアも主題も多様化した現代の美術

状況にあつて、あえて感傷を誘うような日本の風景や閑静な田園の佇まいを主題にし、それを充実した造形へと変換してみせる作家さんというのも稀なものではないでしょうか。

今村さんは、絵画、テキスト、オブジェ、またときに映像や音響など組み合わせ、相互の往還的な関係のなかで、作品の意味を拡げ、あるいは曖昧化させる作品を制作してきました。桃源郷が、そもそも詩に始まり絵画へと展開した画文交響の主題であることから、今村さんには桃源郷の飛躍した表現が期待されました。蓋を開けてみなければ分からないというのが、新作をお願いする際の醍醐味でもあります。当初から、文学作品やユートピアのコーナーのなかに混在させて展示したいとご相談させていただいていた今村さんの作品は、展覧会全体との距離感のなかで、非常に良い位置にあるように感じられました。《楽園にて》に漂う浮遊感、幼年期の残酷さと儂さを強く感じさせ、楽園ではあるものの、桃源郷のなる世界との近しさも示しており、一方で、舞考シリーズなどの原初的なイメージは、楽園やユートピアと併せて紹介することで、桃源郷との対照性を示すも

EXHIBITION

のとなつています。

すでに残された紙面がわずかになつてしまいました。奥村さんのうっそうとした桃花の描写とミニチュア的桃源風景。桃源郷のあちらとこちらの世界を鏡という境界を用いて巧みに描き出した関さんの赤い風景。また、桃源郷の残影、あるいは新たな桃源郷の予兆であるかのような三瀬さんの巨大屏風絵。それらは、物語から想像を膨らませたり、コンセプトアルであったり、また山形の風景が重ね合わされていたりと、各々の日頃の制作や問題意識を出発点にしながら、十分な見応えを持つ作品へと結実しています。そして、時代や地域を越えた様々なモチーフを山水的風景の中に組み込んだ横内さんは、今回の制作に際し、人が移動し、新たな場所での土地に馴らされ、またその地を馴らしながら、暮らしか文化を育んでいくことを考えたといい、それは、漁師の視点ではなく、桃源郷の村人の地点から世界を捉えようとしているように、桃源郷という主題の可能性の大きさを感ぜさせてくれました。

依頼制作でもある今回の作品が、各作家さんの新たな制作へと繋がっていくことも期待され、楽しみです。



今村哲《楽園にて》2011年

VIVA, The Peach Blossom Spring!

桃源万歳!

—東アジア理想郷の系譜—

千葉真智子

会期：平成23年4月9日(土)～5月22日(日)

収蔵品展

くらしと戦争

— 昭和 戦争の記録 —

伊藤久美子

昭和2年および3年の山東出兵、十五年戦争発端となる昭和6年の満州事変、そして、昭和12年には日中戦争(支那事变)の全面化へとエスカレートするまでの日本は絶えず戦争の足音とともにあったのです。昭和の幕開けと同時に、世界的大恐慌の影響をまともに受けた日本経済は未曾有の危機的な状況にあり、それを打開するため中国



ポスター「支那事変國債」昭和14年

前のように、あるいはそんな意識すらもない中で、多くの日本人が毎日過ごしているのではないだろうか。

昭和という時代、昭和20年(1945)8月15日の終戦を迎えるまで、日本は世界の国々と長い間戦争状態にありました。昭和16年12月8日、日本がハワイ真珠湾アメリカ軍港を攻撃したことに

EXHIBITION

太平洋戦争の開戦から70年。戦後生まれの世代がわが国の人口の7割を越え、戦争を知らない世代が社会の主力となっている現在、戦争の悲惨さ、戦争体験者の労苦は、ともすれば忘れ去られようとしています。日本は戦争のない平和な国である——それを当たり

や朝鮮半島、東南アジアでの利権や資源確保を目的として、軍事力をもって日本は海外への進出を押し進めたのでした。

こうした時代の流れは、当然のことながら日本国民に大きな負担、困難を強いることになりました。明治以来、徴兵令による国民皆兵制度の下、満17歳から40歳までの男子には兵役が義務化されていました。これが昭和になると兵役法にかえられ、兵役負担の軽減が盛り込まれるものの、実際には戦時の動員がより確実になる改正がなされました。戦局の拡大とともに身近な人が徴集され、戦場で命を落としました。

先となつていきました。徴用による強制労働、物資不足を補うための金属供出や日用品の配給制導入により、不自由な生活に耐えねばならなくなり、軍隊だけでなく、銃後にあった国民も職場や学校など各人の持ち場で戦線を支えるため戦つていたのでした。そして、本土が空襲を受けるようになると、銃後も戦場となつてしまいました。ここ岡崎の町がB29爆撃機による空爆で燃えてしまったのは、昭和20年7月20日の

ことでした。

この展覧会は、岡崎市が寄贈を受け保管している戦争を伝える資料、記録類を公開するものです。陸軍、海軍の軍服をはじめとする軍装品、戦時下のくらしをうかがわせる品々を徴兵検査の記録や、当時の世相を語る写真などを交えて紹介します。戦争を伝える資料は年とともに散逸し、戦争体験やそれを語り継ぐものは風化の一途をたどりつつあります。戦時下の生活を振り返ることにより戦争と平和について学び考え、あらためて「今を生きる」ことを見つめ直す機会となれば幸いに思います。戦争の悲惨さと平和の尊さが語り継がれることを願つてやみません。



千人針

会期：平成23年6月4日(土)～7月31日(日)

先回紹介した秋田蘭画の交渉は、本館の芳賀徹館長が監修し、全国5会場を巡回した『平賀源内展』でのことでした。東京新聞の垣尾・中田両氏をコーディネーターに源内生地の香川県立歴史博物館(現香川県立ミュージアム)をはじめ江戸東京博物館・福岡市博物館・東北歴史博物館と本館が共同して企画から交渉にあたった展覧会です。第一会場江戸東京博物館での集荷は、地域性に各自の専門性を加味してみんなで分担したものです。資料の多い四国と蘭学系は香川歴史博、西日本の絵画は福岡市博、関東と秋田の絵画は東北歴史博で、その他を江戸東京博と本館で受け持ちました。秋田蘭画の交渉は館長ともども本館で行いましたが、数が少なく貴重な秋田蘭画は、5会場で展示するというので、会場ごとに作品を入れ替え、保存に留意して展示期間を短くすることになりました。そこで活躍していただいたのが東北歴史博の佐藤琴学芸員で、秋田との集荷・返却を繰り返していただきました。基地とした東北歴史博物館は、仙台の北、古代東北の要として築かれた多賀城の乗る台地の麓に

あります。岡崎会場の前会場として展示品の引継ぎにも行きました。そんな記憶の中で、こんどの東日本大震災の報。佐藤さんに何度もメールを送ったのですが弾かれてしまい安否を心配していました。入ってくる情報では敷地が波打ち建物壁にも亀裂が入り、展示・収蔵品の一部にも被害がでているとのことでした。最近になつて館職員は皆無事で再開を目指して頑張っているとの風のたよりが入り、目頭が熱くなる思いをしました。四月二六日再開とのこと、余震も頻繁に続く中、華奢なからだで頑張っておられる姿が思い浮かびます。大勢の方々の命を奪った地震・津波。亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、遠く隔たった土地にあつても、頑張つて復興を目指す人々へのエールを忘れないようにしたいものです。



再開を目指す東北歴史博物館

COLUMN & TOPIC

北関東自動車道を美術専用車で水戸に向かいながら、景色のなかで目についたのがブルーシートを屋根の棟に被せた家屋が多くあつたことである。3・11の震災で屋根瓦が破損したためである。桃源郷を思わせる春ののどかな農村の景色のなかで屋根の青色に震災の現実を感じた。

東日本大震災の影響は全国の美術館・博物館にも及んでいる。当館の特別企画展「桃源万歳」も東北地方の美術館で作品の借用を予定したところを見送つたり、後期展示にも変更をせざるを得ない状況となつた。当初は関東地方の美術館についても借用が危ぶまれたが、借用先の方々の温かいご協力により、予定とおりの桃源郷の展覧会が開催できたことは幸せだといわざるを得ない。

水戸での借用先である茨城県近代美術館では搬出口の前が陥没、液状化による砂が堆積していた。同館では書庫の本が散乱して大変だとのことであつたが幸い予定していた作品については特別のご配慮をい

ただき無事に借りることができた。

このほか埼玉県の遠山記念館、栃木県の県立美術館、小杉放菴記念日光美術館などいづれも震災の影響で閉館中のなか作品集集荷にに応じていただき感謝に耐えない。さらに今回の展示ではアメリカのプリンスン大学美術館、ネルソンアトキンス美術館、セントルイス美術館の三館からも作品を借用した。震災と福島原発の影響で借用が危ぶまれたが、デトロイトから中部国際空港へと輸送変更し、予定通りの作品を搬入することができた。海外からの作品借用による展覧会が予定延期や中止となるなかで、当館で予定通り海外から借用ができたのは、ひとえに前記三館とクローリエとして来日されたネルソンアトキンス美術館のKate Gartlandさんの好意に感謝せねばなるまい。

多くの人の協力のうえに展覧会は成立している。展覧会の作品移動には館のみでなく人間同士のつながりが背後にある。心に残る好意に感謝したい。



弥次さん



喜多さんが行く

稲垣満春

メタボ解消にはじめたウォーキングも、いまやその魅力にとりつかれてしまっている喜多さんですが、今回は中山道の鳥居峠を歩いた時のことをお話ししましょう。

中山道は江戸時代の五街道のひとつで、江戸の日本橋から近江の草津宿まで六十七の宿場が置かれた。鳥居峠は中山道の藪原宿と奈良井宿の間にある峠で、標高は、一、一九七m、中山道最大の難所といわれました。現在は信濃路自然歩道として石畳の道も復元され、往時の中山道を堪能することができま

中山道最大の難所～鳥居峠をゆく

着くことができました。峠には戦国時代、木曾義元が御嶽山に戦勝祈願のために建てたとされる鳥居と御嶽神社があり、喜多さんも手を合わせこの先の安全を祈願しました。しばらく雪化粧をした御岳を望みつつ平坦な道を行き、休憩所にもなっている中利茶屋跡へ。ここから奈良井までは下り坂の連続。途中奈良井側から峠を目指す多くの人とすれ違いながら、藪原から二時間ほどで奈良井の町にゴールすることができました。奈良井は中山道沿いでも妻籠と並ぶ大きな宿場として栄え、現在も往時の姿をそのまま残しており、妻籠宿とともに国の重要伝統的建造物群保存地区として選定されています。



鳥居峠から望む御岳山

COLUMN & TOPIC

桃花源詩に登場する獵師は、いつもの川で漁をするうちに、自分がどれくらい川をのぼり、どこにいるのかも分からなくなる。すると眼前には桃林が立ち並ぶ異様なほどに美しい世界が開かれた。さらに小さな洞穴を見つけて好奇おもむくままに身をよじり、くぐり抜けてみると、そこには日常の現実からは想像もつかないような豊かな農村、理想郷があった……。このように洞穴や森の小道をくぐり抜けて別の世界に移行してゆくという場面転換の手法は、古今東西の昔話や童話などにもよく登場する。たとえば、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』（1865年）では、アリスがウサギを追って穴に落ちるところから不思議がはじまる。ここで大切なのは、「不思議な国」や「桃源郷」が日常性から離脱して到達した世界ではあっても、そこに行く過程は、瞬間移動などで別の次元に行くというのではなく、洞穴の細い道でこちらの世界と通じているということ。つまり話の展開を日常の延長線におくことによって現実味を保ち、リアリティーを与えているのである。

桃源郷におけるくぐり抜けのリアリティー

村松和明

— 不思議の国のアリスから宮崎アニメまで —

よく似た展開は宮崎駿監督のアニメ作品でもよく目にする。「となりのトトロ」(1988年)では、少女がしげみのトンネルを走り抜けて木の根元にあった穴からトトロの棲む世界へと落ちてゆく。また「千と千尋の神隠し」(2001年)においては、主人公の一家が山道に迷ってトンネルに突き当たり、それをくぐり抜けてみると思いもよらぬ不思議な町に迷い込む。

このように別世界への移行を示しつつ、現実世界ともつないでいるトンネルや森の小道は「くぐり抜けのリアリティー」ともいえるべき性質を持ち、桃源郷における小川や洞穴に近い存在といえる。小説の例としては、川端康成の『雪国』(1935年初出)が特筆されよう。「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった」という、あのよく知られた書き出しの二節は、この手法を大胆かつ効果的に冒頭に置いた一例といえるのではなからうか。



「となりのトトロ」しげみのトンネルをくぐるメイ

INFORMATION

桃源万歳！－東アジア理想郷の系譜－

4月9日(土)～5月22日(日)

■講演会

4月30日(土) 「江戸期文人画家の桃源世界」

河野元昭(秋田県立近代美術館館長) ※午後2時から

5月8日(日) 「桃源郷と中国絵画」

宮崎法子(実践女子大学教授) ※午後2時から

■作家トーク

5月4日(水・祝) 「吉本作次×今村哲×横内賢太郎」 ※午後2時から

■落語会

5月15日(日) 「鉄拐」 立川志らく ※午後2時から

■学芸員による展示説明会

5月1日(日)、5月21日(土) ※いずれも午後2時から

くらしと戦争－昭和 戦争の記録－

6月4日(土)～7月31日(日)

■学芸員による展示説明会

6月26日(日)、7月23日(土) ※いずれも午後2時から

「青春18きっぷ」のすすめ

このきっぷを使ったことはないにしても、名前だけは耳にしたことはあるという方も多いのではないだろうか。昭和五十七年に「青春18のびのびきっぷ」として登場して以後、その人気は衰えるどころか、今やJRで売り上げを伸ばしている企画きっぷのひとつである。このきっぷの魅力はなんとと言っても一万二千五百円で五日間(日だと二千三百円)で日本全国のJR線の普通列車に乗り放題という点である(JR線には特急列車しか走っていない区間もあり、そこでは特急にも乗れません)。学校の春・夏・冬の休みに合わせて発売されるので使用できる期間は限られてしまうが、年齢に関係なく誰でも購入することができるので、使ったことがないという方にはぜひお勧めしたい。私はこのきっぷの愛好者で、これまで北は北海道の函館、南は九州の鹿児島まで駆け巡ったことがある。飛行機や新幹線を使えばいいのにと思うかもしれないが、たまにはのんびりと時間をかけて普通列車で旅をするのもいいものである。のんびりと流れていく車窓に、自分だけの桃源郷の世界を見つけることができるかもしれない。(福)

おしゃべり、あれこれ。

私の音楽歴

今年の一月から三月まで、美術博物館では、スウィング・ロンドン(Swing London)ピートルズとその時代展“を”開催していた。

私は、その時代をリアルタイムでは体験をしていないが、私が中学生の時に、友人の兄が持っていたCDを、友人がカセットテープにダビングしてくれて聞いた時に、そのメロディラインとボーカルのハーモニーの美しさに感激し、洋楽というジャンルの音楽を聴き始めるきっかけになったバンドも、ちょうどその時代にデビューしたイギリス出身のロックバンドだった。と懐かしく思い出させてくれた。

大学生になると、お金は無くても暇があり、友人達とよく大音量のライブを聴きに行ったりしていたものだが、暇は無くてもお金があるはずの社会人になってからは、案外とライブからは遠ざかってしまっていた。

そんな中縁あって、PA(電気的な音響拡声装置)を使わない生音メインのコンサートホールのお仕事をさせていただき、大人向けで敷居が高いと感じていたクラシックコンサートの中でも、未就学児童も入場可の子供向けのコンサートもあることを知りました。大人も十分に楽しめる内容の事が多いので是非一度、皆様お試しあれ。(手)

私的フエ文化情報

編集後記 | 今回のアルカディア48号は、発行までに時間を要してしまい、楽しみにしていらした方々には、ご迷惑をおかけいたしました。さて、本文をお読みいただければお分かりかと思いますが、「桃源万歳」展を最後に、館長の芳賀が退任いたします。したがって、名物となっている館長エッセーも本号が最後です。軽やかな語り口でありながら、深く心に響き、目に鮮やかに情景が浮かぶ。我々にとっては、言葉の紡ぎ方によって、文章が如何に豊かなものになるかを学ぶ機会でもありました。どうぞ、最後のエッセーをお楽しみください。(千葉)

表紙図版：吉村作次《田園の宴会》2008年 作家蔵



開館時間 午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第48号 2011年5月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1-1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA